学習会（子ども会）だより５月号 前編
MY SKY 第2号
マイ スカイ
1995年5月16日火曜日発行（毎月第2・第4土曜後の火曜日定期発行）

発行者
板野中学校
学習会
編集・文責：吉成正士

新しい学年がスタートして，もう一カ月が過ぎました。どうですか？学級にはなじめましたか？学習会もいよいよスタートし，部落の完全解放をめざして，部落問題学習に，教科学習にと頑張っていることと思います。

◎衝撃の学習会開講式（4月26日～5月2日：学習会場にて）

さて，その学習会の開講式が５日間にわたって５会場で開かれたわけですが，生徒のみなさんの力強い思いや，揺れる思い，さまざまな思いを聞くことができました。それと，本当にありがたかったのは，保護者のみなさんの激しく切ないくらいの思いに触れることができたことです。次にあげるのは，私がその日に記録した手記です。

４月△日　学習会の開講式が開かれた。なぜ？なぜ？なぜ？胸が熱く，顔まで熱く，目の前にあるテーブルをぶち壊したくなった‥‥。総勢25名の教師が自己紹介を兼ねて，少しずつ自分の思いを語っていく。予想以上の時間がかかり，生徒による語り合いの時間もできなくなった。わずかに生徒が自己紹介を兼ねて，やはり少しずつの思いを語るのみになった‥‥。しかし，その後の保護者会は，思いもよらず熱いものとなっていった‥‥。

少しずつ，少しずつ，それぞれの保護者が，それぞれの思いを語っていく。しかしその雰囲気を一気に深めたのは，あの言葉だった。

「私，いまだに中学校の同窓会に行けんのです‥‥。行きたくて，行こうと何度も思ったけど，それでもやっぱり行けんのです‥‥。結婚して私がここに来たことはみんな知ってます。誰も私のことをとやかく言いません。それは分かってるんです。けど行こうと思っていてもいざ直前になると，いろんな理由をつけて行かないんです。行けないんです！そのことは今まで誰にも言ってませんし，言えませんでした。父さんにすら言ってません。ただ，子どもには言いました。子どもが頑張りきれてないのは，私がこんなだからです。それを知ってるから，あの子も頑張れないんです。そして，私も子どもに強く言えないんです‥‥。あの子には今，親友と呼べる子がいるそうです。その子には何でも話せるそうです。そんな子どもが，私は『うらやましい』

って思うんです。私にも，そんな親友と呼べる人がほしいんです‥‥。」

この思いは共通の思いとして他の保護者に広がっていった。

「私の部落は，周りの中でただ一軒の部落でした。小さい頃，近所の子と遊んでいると，その子の親に『一緒に遊ばれん！』と言われました。その頃は部落差別というものを知らず『どうしてかな？』と思っただけでした。『身の回りも清潔にしているしどこか私に悪いところでもあるのかな？』としか思いませんでした。しばらくしてもう一度遊びに行きましたが，やはり同じことを言われました‥‥。『どうして？』と思い，家の人に尋ねました。すると『そんなら遊ばんでいい。同じ人と遊んだらいい。』と言われ，次第に私は自転車で行かねばならない，遠くの部落に遊びに行くようになりました‥‥。」

また別の保護者は，こうも言った。

「私が夫と結婚する時に，こう言われました。『ぼくは部落の人間だけど，それでもいいか？』って。私はびっくりしました。『こんなことが人前で言えるのか？』と‥‥。けど，夫は続けて言いました。『今までに何度も差別を受けるようなことがあった。だから，ぼくと付き合ってくれるなら，初めに言っておきたい。それを知っても，今なら別れられるから‥‥その上で決めてほしい。』と。私が結婚するまでに５年かかりました。その間に自分なりに勉強もしました。けど今，結婚したことが本当に正しかったのかどうかが分かりません。結婚したことで，私は部落の人間になってしまいます。その上，自分の子どもまでもが部落の人間として差別される立場になってしまいます。そのことを考えると，どうしても結婚したことが幸せだったのかどうか，疑問になってしまうんです！」

他にもたくさん出たであろう心の奥底に潜んでいた本当の思い‥‥。それらを聞いていて，本当に腹が立って仕方がなかった。「うわー」と，吠えたい気持ちになった。自分が受けてきた差別の苦しさや辛さから，子どもには「誰とも仲良くするんだよ」と言い聞かせてきたという。どうしてそこまで優しくなれる？どうして？自分の受けてきた境遇を考えれば，もっと醜い人間になってもおかしくないのではないか！なのに，それでも「仲良くするんだよ」「優しくするんだよ」と言う‥‥。なんという優しさ！差別者の醜さを目の当たりにした人だけが感じる思いだろうか。「差別をする人だけには絶対になってほしくない」という，差別に対する深い憎しみからくるのだろうか‥‥。しかしどうであれ，私はそんなお母さん方を，すごく誇りに感じる。

そして子どもたちに「そんなお母さんを，どうか誇りに感じてほしい！」と言いたい。

しかしながら，どのお母さん方も，どこかで子どもにきちんと説明しきれない自分を感じている。それは，説明できるだけのものを自分の中に持っていないから‥‥。今日，どうして今まで口にしなかったことを私たちに敢えて言ったのか？やはり，どこかで私たち学校に期待しているものがあるからこそだと思う。それを感じ，どう学校で子どもたちに返していくか。それが今の私たちに問われていることだと思う。

４月◇日　保護者会の席上，やはりこういう思いが出てきた。

「とにかくな，後ろ指さされんように育てたらいいんよ。ほれでアカンようになるんだったら，ほれはほの人間が弱いんよ。」

「違う！」と言いたいが，そうは言えない。差別を受けてきた者に共通の思いである。それを否定することはできない。しかし『差別されないように』と勉強すれば，それで全てが解決するのだろうか？黙って我慢していればそれで解決するのだろうか？どんなことを言われても，どんなことをされても，じっと耐えて我慢し，人の良い人間であれば，本当に差別はなくなるのだろうか？我慢をする世の中が，本当に人間としての尊厳に満ちあふれた社会といえるのだろうか？確かにその人間も弱いのかもしれない。しかし，弱くさせたのは誰だ？！人間誰しも，いっつも強くはいられない。強い時もあるが，弱気になる時もある。その波は，大なり小なり必ずある。だからこそ，その穴埋めをしていかねばならない。仲間との関わりの中で，互いに補い合い，穴を埋めていかねばならない。確かにどんな波であろうと，一人で立ち上がれる人間もいるだろう。しかし，みんながみんなそんな人間ばかりではない。人間みんな，性質が違う。だからこそ，共に生きるのだと思う。自分が強いと思っている人間よ！どうか自分だけの世界から抜け出してほしい。「いろんな人間がいるんだ」ということ「自分の強さを求めている人がいるんだ」ということを，どうか分かってほしい！そして，みんなで腕を組むことを，認めてほしい。

参加していた生徒の中に，昨年度担任していた生徒がいた。疲れからか多少元気はなかったが，それでも１番に発言していた。その姿が，すごく嬉しかった。それと，現担任の先生と隣同士に座り，互いに「ああでもない」「こうでもない」と言っている姿を純粋に「良かった」と感じた。きちんと今の状況をクリアしようとしている姿が，頼もしかった。またそれをきっちり受け止め，共に歩んでいこうとする先生の姿も，頼もしかった。その先生とは昨年度，部落問題学習や全体学習の方策で共

に悩みながら頑張ってくれたことが思い出され，余計に嬉しさを感じた。

また後の保護者会では，その生徒のお母さんがこんなことを話してくれた。

「部落外という立場で，私は結婚しました。けど，本当に私は差別に出会ったことがないんです。結婚の時にしても，誰も反対をしませんでした。むしろ『差別をすることはおかしい』と教育を受けてきたので，そのことが当然のように育ってきたんです私の母がどうしてそうであったかは詳しくは分かりませんが，昔『破戒（島崎藤村)』の映画版を見て，ひどく感銘を受けたそうです。そのこともあって，私には『差別することの方が，おかしい』という教育をしてきたんだと思います。」

つくづく,教育の重要性を感じる。学校教育もそうであるが，家庭内での教育。やはりこれは，子どもの成長にとって欠くことのできないものだと思う。ただ，さまざまな状況の中でそれが叶わない場合が，本当に多い。だからこそ，みんながその重要性を認識し，全ての子どもの成長に関わらねばならないと思う。その中で，全ての子どもが自分の置かれた境遇を受け入れ，なおかつ頑張って生きていけるようにしていかねばならない。そのことは，生きている人間全てに課せられた問題だと思う。

これらの思いを受けて，私たちが今一番にしなければならないこと。それは，一人でも二人でも仲間を増やし，それぞれをつなげていくことだと思います。だから，私たちは，どんな場面でも語り続けなければならないのだと思うんです。そのことが，自分の差別意識を洗うことになるし，自分自身を磨くことになるのですから。より多くの人と，この問題について語り合いたいと思います。

次にあげるのは，開講式での生徒のみなさんの感想文です。

自分は部落に生まれたことに自信がもてた。でも，僕は部落民宣言みたいなことをたくさんしているけど，今日父が話をしてくれたことで，なんか頭の中がぐちゃぐちゃになってしまった。お父さんは「お前が差別はいかんと思うんだったら，頑張って話していけ」って言ったけど，「お前が話して，あの子どしたん？とか思われんか?」とか「自分から部落って言うていくんか？」とも言われた。やっぱり僕は人間は対等でなければいかんと思います。やっぱり僕一人が考えていても，今考えていることはできません。仲間にそのことを必死になって言いたいです。今日，僕の心に新しいもやもやができたようです。みんなに早くこのもやもやを話して一緒に考えていきたいです。今年１年間学習会に参加して，自分というものをもっと考えていきたいです。

２年男子Ｔ

※

僕ら２年生の中では，ＡくんとＳくんがあまり来れてない。Ｓくんは昨日の思いで「来る」と宣言してくれたし，１年生の時もちょいちょい来ていた。Ａくんは家も近いのに，１・２回しか来ていない。でも，僕らも悪い。ＡくんやＳくんが安心して学習会に来れるような雰囲気ではない。いつも自分らのことばかりで，そのことに後から気づく。そんなんあかん。２年生／２年生＝１にならなあかん。まず自分からみんなと接していきたい。

それと，今年からの学習会は変わったところもいっぱいある。遅刻したり，忘れ物をしたり，ふざけたりして先生に迷惑かけないようにしていきたい。今年は一つ目標がある。分からないところは先生に聞きまくるということを，仲間と共に頑張る。学習会でどこかに行く時，行きたい子は連れていけるようにしたいので，すかさず言ってください。

２年男子Ｍ

※

私は，今日の学習会で言ったとおり，学習会の部落問題学習とか，学級の部落問題学習とか全体学習は，初めのうち凄く嫌いでした。でも１年の時，学習会の一日研修で今の高校２年生の先輩が自分の思いや気持ちにあるものを言ってくれて「先輩が今頑張っているんだから，私も頑張らなければ」と思ったし，「先輩に続いて私も自分の思いをできるだけ多くの人に聞いてもらえるように努力をしよう」と思いました。そして１，２年と部落問題学習をやってきて,私が変われたことが一つだけあります。１，２年の時はあまり友達といる機会がなかったけど，３年になって同じクラスのＮさんといる機会が多くなり，学習会や部落問題学習を好きになれたことです。それに今，遠い家から板野中学校に来るのはせこいけど，私が選んだ道なんだから，できるだけ頑張って学校や学習会に参加していこうと思います。１，２年の時もお世話になっているけど，あらためて今年一年本当によろしくお願いします。私も頑張っていきます。それと自分の気持ちに負けないようにしたいです。今日自己紹介で言った「去年はクラスになかなかとけ込めなかった」っていうことについても，今年はクラスの中にとけ込めるように頑張りたいです。そしてこの一年でいっぱい友達をつくって，「本当に板野中学校で良かったな，板野中学校で卒業できて良かった」と言えるような一年にしたいと思っています。これからも，家からは遠いけど，学習会を休まない

ように頑張りたいと思います。そして，今年は学習会やクラスの部落問題学習と全体学習で，もっともっと発表して，自分の中にある差別意識を除いていけるようにしたいです。頑張ります。　３年女子Ｉ

※

私は小学校の時から学習会に行っているけど，まだ「変われたな」と思えるところがありません。私は学習会に行くとき，いつも「しんだいなぁ」と思います。Ｉさんが徳島から汽車で学習会に来ているというのを聞いて驚きました。私は学習会場まで２～３分で行けるのに，しんだいなんて思っていたらいけないなと思いました。私だったら，Ｉさんのように１度徳島に帰って，また板野に来て学習会に行くなんてことはできないと思います。みんなの話を聞いてたら「こういうところが変われた」とか「道徳の時間は発表できて楽しい」とか言っている人がいたけど，私も早くこういうことがみんなの前で言えるように，まずは学習会を休まず行けるようにして，真面目に勉強に取り組んでいきたいなぁと思いました。　３年女子Ｈ

※

私は２年生の時，もう学習会に行きたくないと思いはじめた。それは，先生やは「差別は少しずつなくなっている」というけど，同じ地区の大人たちは「いくら勉強してもどこかで差別されるんよ‥‥仕方ないことなんよ」という人もいる。私は一体どうしたらいいのか‥‥。私の心の中に重くのしかかった２つの言葉が頭の中から離れない。それに，みんながよく言う「部落の人」という言葉も私にとっては嫌なんです。そりゃあ私は部落の人間だけど‥‥。先生や他の人たちが自分の意見言うときに「部落の人」と言うけど，なんかわからんけど自分やがスポットライトあてられとるように思ってしゃあない。そんな思いがいっぱいある。すんごく苦しいときもある。でも，今年は下を向かないで，上を向いて頑張りたい。辛いと思ったらよけいに辛くなるけん。「がんばるぞ！」と思ったら勇気も出てくると思う。だから仲間と共に頑張っていく。　３年女子Ｋ

この揺れる思いを，本当にみんなと共有していきたいと思います。

▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼

◊ ◊◊ これからの日程 ◊◊ ◊

いよいよ今月の５月25日（木）には，３年Ｄ組（藤川先生）が本年度のトップを切って

全体学習を行います。それをひかえて，３年生では５月22日（月）に全会場のみなさんを南会場に集結させ，部落問題学習を行う計画をしております。５月８日（月）の，７名という寂しさを吹き飛ばすような学習にしたいものです。また２年生でも，６月１日（木）に２年Ｃ組（森口先生）が全体学習をすることになっています。

部落問題意見発表会（６月６日：学級発表会）も間近になってきました。遠足や中間テストなど，学校行事も目白押しですが，その全ての根底に同和教育が考えられるものにしていきたいものです。頑張りましょう！

部落の起こりとその歴史　第１話

私たちが部落問題学習に取り組んでどれくらいになるでしょうか。人それぞれ，その内容や年月に違いはあるでしょうが，絶対に変わらないものがあります。それが被差別部落の起こりとその歴史です。しかし，そのことを私たちは一体どれくらい理解しているでしょうか。私たちの先祖がどういう理由で差別されるようになったのか，そして今までにどんなことを体験してきたのか。そのことを，私たちはもっと知る必要があるように思います。そのことを知るため，これから時代をさかのぼり，共に学習していきたいと思います。さあ，出発です‥‥。

１．戦国時代のかわた（かわや）

戦国時代，阿波を支配していたのは三好氏という武将でした。当時は，その名の通り戦国時代でしたので，いつ攻め込まれるかわからない情勢でした。だから，どうしても軍事力を大きくする必要がありました。そのために編成されてきたのが「鞘師」「羽織屋」「万小遣人」「革屋三十人」などでした。どれも戦争をするには，武器や武具などを確保する上で，大変重要な職業であったため，藩より扶持米(給料)まで支給されていたほどでした。時代の流れの中で，軍事力を支える土台として，「かわや」は重要な役割を果たしていたといえます。

２．蜂須賀氏入国

蜂須賀氏が新しい阿波の支配者として播磨国竜野から移ってきたのは，天正十三年(1585年)五月のことでした。豊臣秀吉が全国統一をする直前に，秀吉から与えられたのです。しかし全然知らない蜂須賀氏を，地元民がすんなりと受け入れるわけがありませんでした。そこで蜂須賀氏は，入国後直ちに，領内九カ所に出城を築きました。それが「阿波九城」といわれるものです。そして領内の混乱を強大な武力によってねじ伏せ，支配していったのです。その拠点になったのが「阿波九城」です。

それと同時に,蜂須賀氏の新しい政治のねらいとして農民一人ひとりを完全に支配し,年貢などを取り立てるということがありました。そのためには，土豪（その土地の有力者）と小百姓（土豪のもとで働いていた百姓）のつながりを断ち切り，土豪の持っている武力も取り上げねばなりませんでした。それを実現するために検地・刀狩りが実施されたのです。しかし，これも順調に進んだわけではありませんでした。新しい政治に対して一揆を起こすなど，大騒動になり，各地で死闘がくりひろげられました。一揆は数年間に及び，蜂須賀氏が完全に阿波を支配するまでには多くの壁があったといえます。

蜂須賀氏と「かわた」の関係ですが，軍事力を保つという点で「かわた」の存在はやはり必要で，軍需産業の担い手として，また技術者集団として欠くことができない存在でした。したがって，九城の付近に集め住まわせていたほどでした。そんな中秀吉の家来であった蜂須賀氏は，代わって徳川氏に支配(1603年)されることになります。昔の敵の部下になるのですから，それなりの忠誠を尽くさねばなりませんでした。そのためには「軍役」（戦争の役にたつもの）が必要でした。それが出せなければ攻められるのですから，どんなことがあっても必要だったのです。そのために蜂須賀氏は領内の百姓を４等級に分けて負担させようとしました。「政所」「本百姓行，諸職，出家，山伏，町人，おか引，猿引，かわた」「間人,名子,下人,渡守他国人」「子ども牛飼い」の４ランクです。これらの中には，身分を表すものもあれば，職業を表すものもあります。つまりこの頃はまだ身分と職業が混ざっており，蜂須賀氏による民衆の身分支配が，まだ十分にできていなかったのです。したがって，この段階では後のように生活権を奪い去るような，むきだしの身分差別はまだ存在しなかったと考えられます。むしろ「かわた」は百姓と同じく農業生産者として存在していたのです……つづく

次回「阿波藩第一代当主蜂須賀家政の死」　　「やさしい阿波の部落史」より改編